

紀伊国阿弓河莊とその史料（前篇）——阿弓河莊研究の課題——

付 阿弓河莊関係史料目録（一）

伊藤哲平・鎌倉佐保

はじめに

紀伊国阿弓河莊は、片仮名百姓言上状や地頭湯浅氏の暴力などが教科書で取り上げられてきた著名な莊園の一つである。研究も戦前から多くの蓄積があり、武士団・地頭領主制、莊園制、農民闘争研究のほか中世法、訴訟制度など多くの関心からの研究がなされ、阿弓河莊研究としても片仮名百姓言上状の精緻な解釈をめぐる議論、言上状が出された建治年間前後の訴訟に関する研究、現地調査に基づいた地域研究など多くの研究成果がある。また近年では「蘭島および三田・清水の農山村景観」が国選定重要文化的景観に選定され、阿弓河莊現地の景観やその歴史的背景などにも注目が集まっている。

阿弓河莊に関する史料のほとんどは、高野山文書「宝簡集」「続宝簡集」「又続宝簡集」に含まれており、史料集としてはこれまでに①『大日本古文書 高野山文書』（全八冊、一九〇四～〇七年）、②仲村研編『紀伊国阿弓河莊史料一・二』（一九七六年、吉川弘文館）、③『清水町誌 史料編』（一九八二年）が刊行されている。特に仲村氏によって②の編年史料集が刊行されたことで、多くの研究成果が生み出された。また③『清水町誌』では、主要な阿弓河莊関係史料の読み下し・解説が付されるとともに、新たに高野山御影堂文書が所載され②を補完するものとなっている。さ

らに、④高野山靈宝館編『高野山文書宝簡集・続宝簡集・又続宝簡集』（DVD・ROM、PDF版、二〇〇四年、小林写真工業）によって高野山文書の写真版が公開されたことで、写真と照合しながら史料の読解・分析を行うことができるようになった。

しかし、①～③の史料集および④の写真版を用い、これまでの研究成果をふまえ、あらためて阿弓河荘の史料を整理するなかで、史料目録の補訂、史料翻刻の訂正が必要であることが明らかとなった。阿弓河荘は、一一世紀初頭に平惟平の氏寺寂楽寺領として成立し、嘉元二年（一三〇四）に高野山がその支配権を手にするまで、寂楽寺および寂楽寺を管領した円満院門跡の支配した莊園であり、その文書の多くは本来寂楽寺・円満院が所持していたものである。これらの文書が高野山に移った経緯については金泰虎氏の論考があるが、地頭湯浅氏との相論のなかで湯浅氏から提出された文書や年欠の書状類も多く、さらに高野山文書ではこれらが原秩序をとどめずに成巻されているため、どの段階で作成された案文なのか、なぜその文書が残存しているのかなど、個々の文書自体の検証は容易ではなく、いまだその史料の全体像は明らかになっていないと言いたい。本稿においてもその全面的な検証は今後の課題とせざるを得ないが、その前提として、ここでは阿弓河荘関係史料の編年目録の補訂をおこなうとともに、個別の史料について検証を加えたい。

なお、本稿の内容及び史料目録は、首都大学東京大学院中世史ゼミの阿弓河荘史料輪読報告の成果の一部である。本文・注で史料番号を示す場合には、①を「宝（番号）」「続宝（番号）」「又続（番号）」、②を「阿（番号）」、③を「清（番号）」と略記する。

一、阿弓河荘の領有関係と関係文書

まず阿弓河荘の領有関係について確認しておきたい。戦前の研究では、阿弓河荘関係史料が高野山文書に含まれて

いることから、阿弔河莊は高野山領として捉えられてきたが、すでに現在までの研究によって、阿弔河莊の莊園領主は寂樂寺および円満院であったことが明らかとなっている。^③寂樂寺領阿弔河莊は、長保三年（一〇〇一）平惟仲が十年前に買得繼承し不輸不入の権利を獲得して領有してきた石垣莊を、自身の氏寺白川寺喜多院（のちの寂樂寺）に施入したことによって成立した。寂樂寺は、二代別当忠覚のとき法勝寺の末寺となり、園城寺長吏・法勝寺別当の行尊僧正を檢校に迎えたといひ、阿弔河莊は法勝寺への年貢の一部を納入していたことが確認できる。^④

高野山の近くに京都寂樂寺の莊園が成立したことに對して、高野山はその獲得を目指してたびたび干涉をおこなっていたが、寂樂寺は円満院門跡の權威を恃み高野山の干涉を退けていった。高野山が最初に干涉したことを示すのは寛弘元年（一〇〇四）太政官符案、寛弘五年（一〇〇八）金剛峯寺帖案で、ここにはのちに高野山が主張する大師御手印縁起の主張が盛り込まれており檢討を要するが、その成立段階から高野山は阿弔河莊に干涉しようとしていたことは明らかであろう。その動きが明確に見られるのは長寛二年（一一六四）で、おそらく高野山側から寂樂寺へ訴えが出され、寂樂寺所司の陳狀が東寺長者・高野山座主の大僧正寬遍に通達され、金剛峯寺に下し妨げを停止するようにとの通知がなされたことがうかがえる。^⑤この頃から、寂樂寺は円満院門跡の權威に頼るようになったとみられており、一二世紀末、治承・寿永内乱期に高野山が源義経の外題、源頼朝の下文を獲得して一旦その領有を実現したとき、寂樂寺は円満院門跡鳥羽宮定恵法親王（後白河院第五皇子）の政治力によってこれを覆した。その後一二二〇年代頃、円満院門跡嵯峨御所法円僧正のときには寂樂寺・寂樂寺領を実質的に管領するようになっていた。

地頭湯淺氏の阿弔河莊進出についてはここでは委しく述べないが、一三世紀初頭に湯淺宗光が地頭となり、円満院門跡嵯峨御所のとき宗光妻住心が預所職を得、次の円満院門跡桜井宮寛仁法親王の時、寂樂寺堂舎修造・落慶法要等の供養用途料進上の功績によって地頭湯淺氏の預所職永代相伝が認められた。しかし正嘉元年（一二五七）頃より円満院門跡桜井宮が新たに預所を任命したことで、以後、預所職兼帯を主張する地頭湯淺氏との間で相論となった。その後、円満院との関係は複雑に展開したが、文永三年（一二六六）桜井宮寛仁法親王没後には、桜井宮から寂樂寺別

当に任じられ寺領管領を認められたと主張する法印任快との間で相論となり、文永六年（一二六九）以後、円満院の新門跡円助法親王、任快子息按察阿闍梨のもとで地頭湯浅氏と円満院とは協調と対立を繰り返した。そうしたなかで文永十一年（一二七四）地頭非法に対する百姓等の逃散が起り、建治元年（一二七五）の阿弓河荘上村百姓による円満院への提訴、そして円満院による六波羅への地頭提訴へと展開していった。

建治年間の六波羅法廷での相論は地頭湯浅氏が最終的に勝訴となったものとみられている。そして弘安元年（一二七八）より高野山が再び阿弓河荘領有を目指して行動を開始し、正応二年（一二八九）には円満院門跡を相手に訴訟を開始し、嘉元二年（一三〇四）、ついに高野山は円満院門跡恒助法親王から避状を獲得し、阿弓河荘を手にしたのである。^⑩

さて、このような経緯のなかで、寂楽寺・円満院のもとにあった文書が、高野山に移動したと考えられるが、先行研究でも注目されてきたように、それはまず建治三年（一二七七）に、寂楽寺別当任快から一部の文書が高野山に譲渡された。^⑪ 長保三年（一〇〇一）六月二十六日付の平惟仲手印施入状案の裏書きには、^⑫

右此手印本文書者、円満院宮可有御覧之由、被仰下之間、令進上之處、即依御抑留、不下預、爰為謝御不審、書案文、副判形、可被備後代亀鏡、仍奥書了、

建治三年十二月廿一日

法印（花押）

また年月日未詳石垣荘立券文案断簡の第一紙紙背には、^⑬

此阿弓川庄立券文書正文者、所々庄園連券之内□副進事書案文、相副テ数通証文、為令停止向後濫妨、裏書了、早高野山金剛峯寺知行、更々不可有相違之状如件、

建治三年十二月廿一日

法印（花押）

という記載がある。この法印の花押が文永段階に寂楽寺別当であった法印任快の花押であることが河野氏によって明らかにされている。^⑭寂楽寺別当任快は、根本公験である寂楽寺への平惟仲の手印を捺した施入状の原本を円満院宮に進覧したまま返却されていないために、不審なきよう案文に裏書きをし、さらに立券文等の「数通の証文」をそえて、高野山金剛峯寺に文書を譲渡し、阿弼河莊を高野山の知行とすることを認めたのである。河野氏は、文永五年頃から円満院門跡円助法親王が阿弼河莊支配に乗り出すなかで任快は阿弼河莊経営から排除され、円助法親王に上覧した平惟仲手印施入状の正文も奪われてしまったなかで、建治三年、高野山へ阿弼河莊領有権の譲渡を決意したと指摘し、任快を排除しつづけた円助への報復、何らかの代償の獲得のためであったのかもしれないとしている。^⑮六波羅法廷での円満院側の敗訴が決定的になるなかで、任快は寂楽寺に伝来した平惟宗以来の根本公験を高野山に譲渡した。そして翌年八月から高野山は本格的に阿弼河莊領有に向けて動き出すことになる。

このとき任快から高野山に譲渡された「数通証文」については、先の二通の文書と、「阿弼河庄立券」の端裏書をもつ長久三年（一〇四二）十二月二〇日寂楽寺宝物紛失状案が含まれることは間違いないであろう。また平惟仲から伝えられた正暦三年（九九二）石垣上荘立券文案、同四年紀伊国符案、同五年紀伊国在田郡司解案の根本公験がこれにあたと考えられる。^⑯この段階でほかにどの文書が高野山にもたらされたか、また寂楽寺、円満院それぞれの文書所持のあり方等については、現段階ではまだ特定できていない。筆跡、端裏書等についても精査したうえで原秩序を明らかにし検証していく作業が今後必要である。

さて、寂楽寺・円満院のもとにあったと考えられる文書について指摘しておきたいのが、莊園支配に関わる文書について、案文がきわめて多いことである。そのなかで、最も早い段階の文書に、保延三年（一一三七）二月一五日の下司酒部・御使大師の署名・花押をもつ阿弼河下莊検田目録帳がある。この文書は、早い段階の阿弼河莊におけ

る年貢収納の実態が分かる史料として注目されてきた。⁽¹⁷⁾しかし写真版で確認する限り、年月日・署名は異筆であるとみられ、この文書に関しては慎重に扱う必要がある。⁽¹⁸⁾

この文書を除いても、一三世紀の前半頃までの荘園支配に関する文書は、すべて案文として残存しているが、建長七年（一二五五）頃より文永二年（一二六五）までの約十年間には、荘園支配に関わる文書の正文が多く残存している。これは桜井宮覚仁法親王の段階にあたっており、この段階の円満院による荘園支配の実態を明らかにするうえで重要な文書群となろう。この段階の円満院の荘園支配の問題については、地頭との関係のみならず、三で述べるように、公文の存在とその役割が重要な鍵となるはずである。⁽¹⁹⁾

二、円満院の支配と公文所

次に、阿弓河莊史料の検証のなかで、判明した点についていくつか指摘しておきたい。すでに先行の研究によって文書名の間違い・修正がいくつか指摘されているが、そのなかで特に問題となるのが、円満院から荘園支配に関して発給された文書である。河野氏は、（建治元年カ）三月八日左衛門尉孝重奉書案⁽¹⁹⁾について、その内容は、地頭に条々非法の停止を命令したものであることから、左衛門尉孝重を円満院家司であると推定し、文書の発給者は円満院門跡円助法親王であると指摘した。⁽²⁰⁾同様に考えれば、文永一〇年八月一〇日左衛門尉孝重奉書案とされている仮名交じりの書状案も奉書文言はないが袖判をもっていることから、円満院門跡円助法親王御教書とみてよいだろう。⁽²¹⁾

また、すでに先行研究では正しく解釈がなされているが、御影堂文書中の、三通の文永一一年一月二四日付散位某奉書案⁽²³⁾について、『清水町誌』では署名の「散位、」を北条時輔に比定し六波羅御教書としているが、その内容は、(1)阿弓河上莊地頭に対して違乱を停止し百姓を安堵するよう命じたもの、(2)は上莊番頭百姓等中に対して、早く莊家に還住するよう命じたもの、(3)は下莊地頭に対して去年未進、当年未済につき預所の度々の下知にもかかわらず

沙汰がないことを問いただし、納入を命じたものであり、これも円満院門跡の御教書とするのが妥当である。

また、円満院の御教書と考えられるものとして、(建治元年)三月二〇日法眼浄□の署名のある御教書がある。⁽²⁴⁾これについては『大日本古文書 高野山文書』、『紀伊国阿弓河莊史料』ともに「東寺長者御教書」とし、河野氏もこの見解を引き継いだうえで、さらに(建治元年)三月一四日の「阿弓河莊公文所注進状并御教書案」⁽²⁵⁾について、後段の御教書案の署名が前述三月二〇日御教書と同じく法眼浄□であることからこれについても「東寺長者御教書案」とし、前段部分を「東寺公文所注進状案」という文書名に訂正した。しかし、『大日本古文書』がこれを「東寺長者御教書」としたのは、阿弓河莊を高野山領とみていた段階の認識であると考えられる。河野氏は東寺長者の介在について解釈を試みているが、この段階で東寺長者の介在は不自然であり、これらの文書も円満院門跡円助法親王御教書案とするのが妥当であろう。

さらに、ここにみえる公文所についても東寺公文所とは捉えられない。『紀伊国阿弓河莊史料集』ではこのほかにも公文所と見えるものを「阿弓河莊公文所」あるいは「公文」としているものがある。これについて検討しておきたい。正嘉元年(一二五七)八月日湯浅宗氏綿増分注進状⁽²⁶⁾によれば、地頭湯浅宗氏は「公文所勘定」を請けて以下のように返答した。

阿弓河莊 自建長三年至于康元元年六十年之間綿増分事

(中略)

右、件綿代物事、公文所勘定謹拝見候畢、自今以後、以見物被召之時者、非沙汰之限、為代物者、隨時之和市、可令進納之、以此等之趣、可令下知庄官百姓等之由、畏承候畢、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正嘉元年八月 日 左衛門尉藤原(花押)

ここにみえる「公文所勘定」に相当するのが、(年月日未詳)「阿弓河莊綿増分土代」⁽²⁷⁾である。さらにこの文書の裏には、正嘉元年八月日左衛門尉時平奉書案が写されている。それは以下の通りである。

公文所勘如此、自今以後者

右、件絹綿御年貢等、自今以後者、以見物被下之時者、非沙汰之限、為代物者、隨時之和市、可令進納、以此等之趣、可令下知庄官百姓等給之由状、所被仰下候也、仍執達如件、

正嘉元年八月 日

左衛門尉時平

預所三郎左衛門尉殿

先の地頭湯浅宗氏による請文の文言から、これが公文所勘定の内容と左衛門尉時平奉書の返答であることが明らかであり、絹綿年貢についての指示を出しているのは円満院門跡であり、左衛門尉時平奉書は円満院門跡御教書と捉えられる。またその勘定を作成したのも円満院の公文所と考えるのが妥当であろう。なお、同年八月二五日には阿弓河御莊公文紀(紀光澄)による年貢未進結解も作成されている。これは莊官である公文が円満院への報告のために作成した未進結解であり、それと公文所から出された支払い命令のための勘定状とは区別して捉える必要がある。

また、文応元年(一二六〇)八月二十六日「阿弓河莊公文下知状案」⁽³⁰⁾と題された文書がある。これは端裏書に「被下阿弓河庄官等中、公文所下知案条々事」とあり、阿弓河莊の莊官等に宛てた公文所の下知であり、その内容は御年貢絹代錢・夏白布代錢・上下御綿定年貢・逃死亡跡分・去年未進等の究済、年貢結解状に関する指示、材木の進済に関する指示を伝えたものである。差出は「公文■」⁽³¹⁾となっており抹消部分が写真では判読ができないが、その内容からして円満院公文所からの年貢納入に関する指示であることは間違いない。

もう一点、公文所の発給した文書に、文永元年(一二六四)六月六日「阿弓河莊公文所注進状土代」⁽³²⁾がある(へ)

は割書き)。

(端裏書)「年々未進事 公文所注進土代」

阿弓河庄上下年々綿未進事

一 正嘉二年 正元々年 文応元年

已上三ヶ年未進三百三両 庄官注進定

代錢二十一貫百九十五文(但近年納法定、十兩別六百五十文、)

以此未進、道米代^仁、百姓等^仁可募給之由、去年御下知了、

一 弘長元年未進百三十四兩三分 同二年未進二百四十兩

已上三百七十四兩三分

代錢二十四貫三百七十文(但近年納法定、十兩別六百五十文、)

於此代錢者、念可沙汰進之由、去年二月雖被仰下、未及其沙汰歟、

右、大概注進如件、

文永元年六月六日

公文所上

正嘉二年から文応元年までの三カ年の未進数は庄官の注進によって出された数値であり、それに対してここでは、この未進を道米代に立用することについて去年御下知を下したことが記され、また弘長元年の未進については、この代錢を沙汰するように去年二月に命令したがいまだその沙汰がないと述べており、この公文所注進も円満院公文所からの通達として示されたものとみてよいであろう。以上、これらの公文所については「阿弓河庄公文所」とするのは正確ではなく、円満院公文所と捉えるべきであろう。

なお、円満院公文所が年貢に関する注進・勘定を行っていることが見えるのは、先にも指摘した桜井宮寛仁法親王の時である。阿弓河荘支配において、桜井宮の段階をどのように捉えるかが今後の課題となろう。

三、阿弓河下荘の公文紀氏

次に公文に注目したい。従来の阿弓河荘研究では、公文は、百姓らの片仮名言上状作成の分析において、身分と文字の観点から、漢字の読み書き能力がもつとも高い人物であることが指摘されてきた。⁽³³⁾また、年貢の収取関係の分析からは、荘園経営の現地における実務担当者として捉えられてきた。しかし、片仮名言上状が出される前後における公文の動向については明らかにされているが、阿弓河荘における公文の役割については、実務担当者という位置づけがなされているだけで、あまり注目されてこなかった。先に確認したように、阿弓河荘をめぐる領有関係の把握に混乱が生じていたことや地頭の暴力性、寂楽寺側の人員構成などに研究が集中したことなどが大きく関係していたといえよう。このような状況の中で、一三世紀後半の構造変化の中で公文の現地での役割を本格的に分析した河野通明氏の研究が注目される。⁽³⁴⁾河野氏は、一三世紀後半の年貢賦課の変化・代銭納など経済構造の変化に伴い、公文の役割の重要性が増していくことに注目した。またその後、金泰虎氏は、円満院による荘園支配再編のなかで公文の役割が重要になってくることに注目し、地頭と預所を兼帯した湯浅氏及びその裏にいる高野山を恐れた円満院が、公文所を通して現地に詳しい荘官（公文）らを把握することで阿弓河荘の直務支配を実現したことを明らかにした。⁽³⁵⁾河野氏・金氏の研究は視角は異なるが、公文の役割の重要性が高まるとしている時期は一致しており、それはまさに円満院門跡桜井宮の時にあたっている。たしかに一三世紀後半は代銭納など経済構造の変化や円満院の直務支配への転換のなかで、在地での公文の役割は重要になってくると考えられる。ただし、この時期に公文の活動の実態が明らかになるのは、円満院の直務支配によって公文の注進状や申状が多く残存したためであり、公文の役割については、文書残存状

況も考慮しながら、それ以前の段階から通時的に分析していくことも必要であろう。また、阿弓河莊史料を扱う際は、伝領や領有関係を示す文書と公文や百姓などが書いた在地の状況を示す文書とを区別して考える必要がある。この点についても、公文の史料を扱う上で注意したい点である。

さて、史料上においてはじめて公文の名がみえるのは、嘉禎四年（一二三八）で、ここには「公文僧」「公文文章生」の二人の署名が見え、寛元四年（一二四六）の史料では、「公文僧」が阿弓河莊の綿や預所の得分を注進しているが、ここでも「公文二人」の存在が確認できる。⁽³⁶⁾ 続いて正嘉元年（一二五七）には、「下公文紀（光澄）」「上公文僧」がみえ、明確に上荘・下荘それぞれに公文の存在がみえるようになる。⁽³⁸⁾ またここではじめて地頭との衝突の様子が窺え、地頭が給田を地頭名としたり、先例以上に人夫を召し仕たりしていることが円満院に注進されている。また同年には、公文の手によって作成された年貢の未進注文が残されている。⁽³⁹⁾ ここでは、先の「上公文僧」がみえず、上村・下村あわせて「公文紀（光澄）」⁽⁴⁰⁾ がとりまとめていることが注目される。「上公文僧」については、同年、荘内の上村における在家を注進しており、上荘公文と下荘公文で別々の役割を担っている様子が窺える。その後、弘長元年（一二六一）になると、上公文として酒部氏がみえるようになる。⁽⁴¹⁾ これ以降、「上公文酒部（安則）」と「下公文紀（光澄）」が連署して年貢の注進状などを作成するようになる。⁽⁴²⁾

ここでは円満院門跡桜井宮の直務支配のもとで登場する下荘公文紀光澄に注目したい。紀光澄は、正嘉元年（一二五七）から建治二年（一二七六）頃まで下荘公文（下公文）としての活動が見られる（文永十一年以降は出家して乗蓮と名乗った）。光澄（乗蓮）が署判した文書は一八通あり、綿・道米・材木などの課役に関する文書、地頭との衝突を訴えた申状など、光澄自身が自筆で認めた平仮名交じりの文書が多く残存する。下荘公文紀光澄については、河野氏が上荘公文酒部安則とともに検討を加えており、地頭と百姓との間に立って仲裁の役割を果たした上荘公文に對して、下荘公文紀光澄は地頭に奪われた土地返還にも地頭に気を遣い、子息の代には地頭湯浅氏の郎等となりその傘下で生きていく道を選択したと論じた。また金氏は、百姓との関係も含めて公文の動向を捉えている。ここでは公

文について全面的に論ずることはできないが、下荘公文紀氏と田満院との関係の一端を考える素材として次の史料を掲げた⁽⁴³⁾。

川俣宛文二通候内

一ハ 貞則宛給 おうちにて候き、^(祖文)

一ハ 秀澄 光澄父にて候き、^(孫河)

するかの公の大けんちうに、取帳と申、名よせと申候、ミナ光澄丸之名にうけおうたる事、けんせんに候、むかしよりこの田地お、ちとう名^(地頭)二つけおきたる事候ハす候、すへ給て地けん、さいちの百さう等か、さかいさため^(定)てたひて候、ふるきせうもんもちて候、秀澄丸かとき、けしやうのむねと申て候ハ、貞則丸かすへのろんの時^(時)のけしやうにて、宛文^(宛文)お給て候、さかのきミの御時、させるゆへ候ハで、ゆあさのあまこせん^(尼御時)申給候てのち、三十余年^(仰)ニまかりなるところにて候、この八月のころ、ちとう、この川俣^(領家)ハ領家御しんたいといふ事ハ、なにおもちておせられたるそ、庄官・百さうもしりたるか、又さもなき物らハ、りやうけ御しんたいならすといふ、きさうもん^(起語文)かけと申され候き、それニつき候て、かゝる代々の預所の宛文^(宛文)お持ちて候へハ、そのきさうもんえかき候ハしと申候しかハ、かの宛文^(宛文)お候へきよし申候しかハ、ミせ申て候お、この文^(文)ハ御さたの時ハ、とりいたすへし、人のせうもん^(お)わかニする事ハなき事ナレハ、御さたの時ハ、あわせまいらせんする也とて、ちとう殿のもとにおかれて候、

正元元年九月 日

紀光澄(花押)

これは正元元年(一二五九)九月下荘公文紀光澄が、地頭に押さえられてしまつていた荘内の川俣という地の返還を訴えた申状である。この件については二ヶ月前の七月八日付の光澄申状も残されており、それによれば川俣という七段小の地は、田満院門跡嵯峨御所法円僧正が阿弓河荘を管領していた時、罪もなく没収されて預所尼住心(地頭湯

浅宗光の妻、宗氏の母）に宛てられてしまい、すでに三十年以上経ってしまったという。右の史料にもあるように、川俣の地とは、光澄の「おうぢ」^{（祖父）}である貞則、そして父秀澄が預所より宛行われてきた地であり、光澄の代には、大検注の取帳・名寄において光澄丸名に請け負った地であった。もとは紀氏が百姓から買得した地であったようである。ここでその取り戻しが訴えられたのは、正嘉元年（一二五七）に円満院門跡桜井宮が地頭湯浅宗氏の兼帯した預所職を解任して新預所を補任し直務支配に乗り出したことと関係しており、そのなかで桜井宮は、この地が検注目録に住心の給田とされていたことを問題視して光澄に問いたしたのである。光澄は、七月の申状では、本来は見参して委しく申し上げたいが人の目を憚って上洛はせず書面で返答したと述べ、「せんし候ところ、御さた候てかへし給まては（存）せんす候、御さた候て上のこふんともなり候ハ、よろこひ入り候なん」として、川俣の地を返していただきたいとまでは存じておらず、御沙汰のうえ領家の御分ともなれば喜ばしいことです、と述べている。しかしこの返答を知った地頭湯浅宗氏は、八月頃、光澄に対して、「川俣の地が領家進退とは何を根拠としているのか、莊官・百姓もからの宛文があるので起請文を書くことを拒否したが、この宛文を地頭に取られてしまったのだという。この一件については、河野氏は公文光澄は地頭の目を憚り、地頭に手も足も出ない状況となっていたとしたが、金氏は、この段階では光澄が地頭に抵抗する態度を見せていると評価している。この段階での光澄は、地頭に気を遣いながらも桜井宮との関係をもって地頭に対抗しているとみることができよう。またこの史料で注目されるのが、紀光澄の祖父貞則・父秀澄の二代にわたり代々円満院の任命した預所から河俣の地を宛行われてきたことである。貞則・秀澄が公文であったことを示す史料はないが、尼住心が預所となる以前から、紀氏は預所から宛文をたまわって莊内の地の領有を認められるような在地の一族であったことがわかる。そうした関係を前提に紀光澄は下莊公文に任命されたのであろう。

光澄の七月の申状には、桜井宮が検注目録の記載について光澄に問いたしたので、地頭湯浅氏側に嵯峨御所から

の下文提出を求めたことが記されており、桜井宮が公文を通じて、阿弓河荘の下地・年貢等の状況を詳細に把握しようとしていたことがわかる。また円満院が公文光澄に下村の預所得分を注進させた史料もあり、積極的に莊園経営の実態を把握しようとしていたことがうかがえる。^④そしてそれをもとに熊野詣の奉加米、熊野道米、大宮院（後嵯峨天皇皇后）の御産祈禱料、材木等の臨時賦課が行われていった。これらの臨時賦課は、百姓等の歎きによって年貢未進分が宛てられることとなり、公文によって算用が行われ、また材木の調達・納入をめぐる円満院との交渉がおこなわれた。こうした公文光澄の活動や算用・文筆能力は、円満院の直務支配のもとでその文書が残されたため明らかになるが、おそらくは代々の在地での活動のなかで培われたものであったと考えられる。公文の活動や莊園支配の実態については、その前後の時期においても文書の残存状況を含めて検討していくことが必要となるだろう。

おわりに

以上、個別の文書の検討を踏まえて、補訂した文書目録を巻末に付した。建治年間以降の訴訟関係文書については、年号のない書状も多く含まれており、さらに検討を要することから、今回は建治元年までの目録を掲載することとした。阿弓河荘をめぐるのは、片仮名言上状・地頭湯浅氏の暴力性・建治期における相論など特定の時期の事例に注目が集まってきたが、全体を通して史料を検証したうえで、それぞれの段階における円満院・寂楽寺・高野山・莊官・地頭湯浅氏・百姓等のそれぞれの論理や動向をより具体的に明らかにしていく必要がある。また、阿弓河荘史料の分析を通して、『高野山文書』自体の史料性格や扱う際の課題点も明らかにするであろう。『高野山文書』中の阿弓河荘園関連史料には、無年号のものや断簡のものが多く、いまだ把握されていない阿弓河荘史料も存在していると考えられる。本稿では課題を示すに留まったが、後考を期したい。

註

- (1) 金泰虎「阿弓河庄における庄務権と文書」(大阪市立大学大学院文学研究科『人文論叢』第三三卷、一九九四年)。
- (2) 赤澤春彦「紀伊国阿弓河庄に残された二通の訴状正文」(『古文書研究』六三号、二〇〇七年)では地頭の訴状正文が領家側に残された経緯が明らかにされている。
- (3) 主なものとして、仲村研「紀伊国阿弓河庄における片仮名言上状の成立」(『莊園支配構造の研究』(吉川弘文館、一九七八年所収)、初出は一九六五年)、河野通明「阿弓河庄をめぐる寂楽寺と円満院」(寺院史研究会編『中世寺院史の研究 上』法藏館、一九八八)、高橋修「阿弓川庄―領主間の争いと百姓たちの闘争―」(山陰加春夫編『きのくに莊園の世界』上巻、清文堂、二〇〇〇年)、同「紀伊国阿弓川庄」(『講座日本莊園史』8、吉川弘文館、二〇〇一年)。
- (4) 建長七年二月二日阿弓河上村納錢請取状(又統五〇一九五三、阿一二二)に「法勝寺護摩用途貳貫柒百文」(文永四年カ)阿弓河莊雜掌重言上状案断簡(御影堂文書 清補二)に、「法勝寺末寺寂楽寺領阿弓河莊」という表現が見られることについて河野氏は、円満院との対抗上、任快がことさらに法勝寺との關係を表面に押し出したもので、法勝寺自体との權門としての政治力はほとんどなかったことを指摘している(河野前掲注(1)論文)。
- (5) 寛弘元年九月二五日太政官符案(前田家本「高野寺縁起」、阿補七)。
- (6) 寛弘五年一〇月二七日金剛峯寺帖案(金剛峯寺雜文、阿補八)。
- (7) 長寛二年八月一日大僧正寛遍請文案(又統五六一一一六、阿一九号)。
- (8) 河野前掲(1)論文。
- (9) (文永四年カ)阿弓河莊雜掌陳状案(又統五六一一二八、阿一六八)、(文永四年カ)阿弓河莊雜掌言上状案(又統一三一七〇・又統三四一三六六、阿一七七)、(文永年中)阿弓河莊雜掌重言上状案断簡(御影堂文書、清補二)、建治二年六月阿弓河莊雜掌進状案(又統七九一四四九、阿二三四)。
- (10) 嘉元二年三月七日後宇陀院院宣案(又統七八一四二七、阿二八四)、嘉元二年三月八日東寺長者御教書(宝五三一六七九、阿二八七)。なお阿弓河莊の領有關係、経緯については前掲注(3)高橋論文参照。
- (11) 仲村研「阿弓河莊研究補遺」(『中世地域史の研究』高科書店、一九八八年所収、初出は一九七八年)、河野前掲注(3)論文、金前掲注(1)論文。
- (12) 又統一三四一九二五、阿七。
- (13) 御影堂文書、清五。
- (14) 河野前掲注(3)論文。

- (15) 河野前掲注(3) 論文。
- (16) 又続三四—二六四・正智院文書、阿二。又続一三四—一九二七、阿五。又続一三四—一九二六、阿六。
- (17) 又続五六—一〇八、阿九。仲村前掲注(1) 論文。湯川雅史「湯浅氏の領主制と荘園領主」(『日本歴史』五七六、一九九六年)。
- (18) なお阿弓河荘で「酒部」の名字をもつ人物が荘官として多くみられるのは、弘長期(一二六一—六四)であり、「酒部」は阿弓河上荘の公文として見られる。
- (19) 宝三三—四二七、阿一九七。
- (20) 河野前掲注(1) 論文。
- (21) 又続七八—一四二〇、阿一九六。
- (22) 高橋前掲注(1) 論文。
- (23) 清補三(1)(2)(3)。
- (24) 宝三三—四二八、阿二二九。
- (25) 又続七九—一四三六、阿二二八。
- (26) 宝三三—四一九、阿一三一。
- (27) 又続七八—一四二九、阿一二九。
- (28) 又続七八—一四三〇、阿一三〇。
- (29) 又続五八—一四二一、阿一二八。
- (30) 又続三四—三五四、阿一四三。
- (31) これが円満院公文所からの発給文書であることについては、金泰虎氏の指摘がある(「荘園制支配と百姓結合の展開」紀伊国阿弓河庄―『ヒストリア』一五五、一九九七年)。
- (32) 又続七八—一四二二、阿一六二。
- (33) 黒田弘子『ミミラキリハナラゾギ一片仮名書百姓申状論―』(吉川弘文館、一九九五年)。
- (34) 河野通明「阿弓河庄の百姓・公文・地頭」(『ヒストリア』一一九、一九八八年)。
- (35) 金前掲注(31) 論文。
- (36) 嘉禎四年一月日阿弓河上荘御綿注進状(又続七八—一四〇一、阿一一一号)。
- (37) 寛元四年三月日阿弓河御荘預所得分注進状(又続五六—一一四、阿一一四号)。
- (38) 正嘉元年八月一七日阿弓河荘官注進状(又続七八—一四〇六、阿一二七号)。
- (39) 正嘉元年八月二五日阿弓河御荘御年貢未進注文(又続五六—一二二一、阿一二八号)。

- (40) 正嘉元年九月八日阿弓河御莊上村在家注進狀（又統七八一―一三九五、阿一三四号）。
- (41) 弘長元年三月日阿弓河莊公文年貢注進狀（又統五六一―一三九五、阿一四六号）。
- (42) 弘長元年九月一〇日御熊野詣道米注進狀（又統七八一―一四〇九、阿一四八号、弘長元年十一月日阿弓河莊上下莊官百姓等請文（又統七八一―一四〇七、阿一五〇号）など。
- (43) 正元元年九月日阿弓河下公文紀光澄申狀（又統七八一―一四〇二、阿一四〇号）。
- (44) （正元元年カ）七月八日阿弓河下公文紀光澄申狀（又統七八一―一四〇三、阿一三八号）。
- (45) 文応元年十一月日阿弓河莊下村預所得分注進狀（又統七八一―一四〇八、阿一四四）。

阿弓川荘関係史料目録 (一)

	和暦	西暦	月	日	文 書 名	原出典 (※1)	阿弓河荘史料 (※2)	遺文	備 考 (※3)
1	弘仁7	817	7	8	太政官符写	総持書類從	1	なし	
2	正暦3	992	4		石垣上荘立券文案	『高』又統34-364 高野山正智院文書	2	平4908	
3	正暦4	993	8	28	紀伊国符案	『高』又統134-1927	5	平357	
4	正暦5	994	9	27	紀伊国在田郡司解案	『高』又統134-1926	6	平360	
5	長保3	1001	6	26	平准仲手印施入状案	『高』又統134-1925	7	なし	『阿弓川』の初見
6	年月日未詳				石垣上立券文案断簡	御影堂文書	なし	なし	清5 紙背に建治3年12月21日法印判
7	寛弘1	1004	9	25	太政官符案	前田家本「高野寺縁起」	補7	平436	
8	寛弘5	1008	10	27	金剛峯寺配案	金剛峯寺雜文	補8	なし	
9	長久3	1042	12	20	寂榮寺宝藏物紛失状案	高野山御影堂文書	なし	平6166	清4
10	永承4	1049	12	28	太政官符案	『高』又統88-1627	なし	平675	寛弘元年の官符の記載あり
11	保延3	1137	12	5	阿弓河上荘横田日録帳	『高』又統66-1108	9	平2381	年月日部分は本文と異なり
12	長寛2	1164	8	11	大僧正寛通請文案	『高』又統66-1116	19	平3302	
13	治承2	1178	閏6	26	造日前国懸宮役請文案	宮内庁書陵部所蔵壬生家古文書	26	平3838	
14	治承4々	1180	4	19	藤原行隆奉書	『高』宝33-414	28	平3911	
15	治承5	1181	5	13	藤原行隆奉書	『高』宝25-329	29	なし	
16	治承5	1181	1	20	藤原行隆奉書	『高』宝33-413	30	平3951	
17	寿永3	1184	3		金剛峰寺衆徒等解状	『高』宝33-415	32	平4146	
18	元暦1	1184	5	2	源義経書状	『高』宝33-415	36	平4167	
19	元暦1	1184	5	2	五月二日条 (源義経書状引用)	高野春秋編年冊録巻第七	35	なし	
20	元暦1	1184	7	2	源頼朝下文	『高』宝33-416	37	平4183	
21	元暦1	1184	7	2	源頼朝下文文案 (源頼朝下文引用)	高野山御影堂文書	なし	なし	清補4 (2)
22	元暦1	1184	7	2	七月二日条 (源頼朝下文引用)	高野山御影堂文書	35	なし	
23	元暦1	1184	7	2	七月二日条 (源頼朝下文引用)	高野春秋編年冊録巻第七	38	なし	
24	元暦1	1184	7	2	源頼朝御教書案 (藤原俊兼奉書案)	高野山御影堂文書	なし	なし	清補4 (3)
25	元治1	1185	11	9	阿弓河上荘年貢送文案	高野春秋編年冊録巻第七	35	なし	
26	文治1	1186	2	24	中原元奉書案	『高』又統66-1119	43	鎌15	
27	文治2	1186	3	17	北条時政下文案	『高』又統78-1392	44	鎌54	
28	文治2	1186	3		阿弓河上荘在家昌桑栗林漆等檢注状案	『高』又統11-28	45	鎌73	
29	建久4	1193	9		阿弓河上荘色々所当物等注進状案	『高』又統66-1109	53	鎌68	
30	建久4	1193	9		阿弓河上荘色々所当物等注進状案	『高』又統66-1110	54	鎌691	
31	建久4	1193			阿弓河上荘田檢注状案	『高』又統66-1111	55	鎌689	

	和暦	西暦	月	日	文 書 名	原出典 (※1)	阿弓河莊史料 (※2)	遺文	備 考 (※3)
32	建久4	1193	9		阿弓河上莊定田地子檢注目録案	『高』又統80-1468	56	鎌692	
33	建久8	1197	9	21	源頼朝下文案	『高』又統78-1394	57	鎌935	
34	建久8ㄱ	1197	10	13	文覚譚状案	『高』又統78-1394	58	鎌939	
35	建久8	1197	11	3	藤原隆房家政所下文案	『高』又統78-1393	59	鎌943	
36	正治1	1199	8	5	藤原隆房家政所下文案	『高』又統56-1117	60	鎌1068	
37	正治1	1199	8	5	阿弓河御莊預所下文案	『高』又統56-1118	61	鎌1069	
38	年月日未詳				阿弓河莊文目録案	『高』又統56-1136	65	なし	
39	元久1	1204	8	5	(阿弓河) 上莊年貢相檢納状案	『高』又統79-1466	66	鎌1471	
40	元久1	1204	8	19	(阿弓河) 上莊年貢相檢納状案	『高』又統79-1466	66	鎌1472	
41	承元4	1210	2	10	将軍家(源実朝) 政所下文案	『高』又統78-1394	71	鎌1829	
42	承元4	1210	2	10	二月十日条	吾妻鏡	72	なし	
43	建保7	1219	1	14	後鳥羽上皇院宣	『高』宝48-561	73	鎌2417	
44	建保7	1219	1	14	後鳥羽上皇院宣案	金剛峯寺文書	74	鎌2418	
45	建保7	1219	1	14	正月十四日条(後鳥羽上皇院宣引用)	高野春秋編年輯録卷第八	76	なし	
46	建保7	1219	1	15	後鳥羽上皇院宣	『高』宝48-562	75	鎌2420	
47	承久3	1221	閏10	12	関東下知状案	『高』又統78-1394	80	鎌2873	
48	承久3	1221	11	6	六波羅安堵状案	『高』又統78-1394	81	鎌2884	
49	承久3ㄱ	1221			六波羅?御教書案断簡	『高』又統78-1394	82	鎌2885	
50	貞応3ㄱ	1224	10	20	行慈書状	神護寺文書	92	鎌3304	
51	元仁2ㄱ	1225	2	14	定圓書状	神護寺文書	94	鎌3344	
52	嘉治1	1235	12	29	櫻井宮寛仁法親王御教書案	『高』又統57-1146	101	鎌4879	
53	嘉治1	1235	12	29	櫻井宮寛仁法親王下文案	『高』又統57-1147	102	鎌4879	
54	嘉治1	1235	12	29	櫻井宮寛仁法親王下文案	『高』又統78-1399	103	鎌3328	
55	嘉治4	1238	11		阿弓河莊御細注進状案	『高』又統78-1401	111	鎌3328	
56	寛元4	1246	3	3	阿弓河御莊預所得分注進状案	『高』又統56-1114	114	鎌6659	
57	寛元5	1247	5		金剛峯寺調度文書目録下	『高』統至16-257	なし	鎌6707	
58	建長5	1253	1		寂楽寺別当職談状案	高野山正智院文書	119	鎌7516	
59	建長7	1255	12	22	阿弓河上村郷鏡請取状	『高』又統50-953	122	鎌7947	※4 加判は桜井宮か
60	建長8ㄱ	1256	4	1	左衛門尉長孝書状	『高』宝38-418	123	鎌7985	差出の花押は左衛門尉長孝
61	建長8	1256	6		高野山住僧等解状案	『高』又統129-1914	124	鎌8006	
62	建長8ㄱ	1256			高野山住僧等解状案	『高』又統129-1913	125	鎌8007	
63	(建長8)	1256			高野山住僧等解状案	『高』又統129-1913	126	なし	阿124と同文
64	正嘉1	1257	8	17	阿弓河莊非御年貢未進注文	『高』又統78-1406	127	鎌8132	
65	正嘉1	1257	8	25	阿弓河御莊御年貢未進注文	『高』又統56-1121	128	鎌8136	
66	正嘉1ㄱ	1257			公文所勘定状案	『高』又統78-1429	129	鎌8069	紙背は阿130

	和暦	西暦	月	日	文 書 名	原出典 (※1)	阿弓河莊 史料 (※2)	遺 文	備 考 (※3)
67	正嘉1	1257	8		左衛門尉時平奉書案 (円満院門跡御教書案)	『高』又統78-1430	130	鎌8140	阿129の紙背
68	正嘉1	1257	8		湯淺宗氏細増分注進状	『高』宝33-419	131	鎌8138	
69	正嘉1	1257	9	3	湯淺宗氏細増分注進状案	『高』又統34-353	132	鎌8139	紙背は阿143
70	正嘉1	1257	8		八月日条 (公文所勘定状引用)	高野春秋編年輯録巻第九	133	なし	
71	正嘉1	1257	9	8	阿弓河御莊上村在家注進状	『高』又統78-1395	134	鎌8143	
72	年月日未詳				阿弓河莊官訴状	『高』又統56-1134	135	なし	
73	正嘉2	1258	9	16	阿弓河下莊御綿代裁請取状案	『高』又統56-1135	136	鎌8279	
74	正嘉2	1258	9	26	阿弓河下莊御綿代裁請取状案	『高』又統56-1135	136	鎌8285	
75	正嘉2	1258	10	4	阿弓河御莊御綿送文案	『高』又統78-1405	137	鎌8295	
76	正嘉頃		9	6	宗範消息	『高』又統78-1397	147	鎌22026	むま殿 (馬入道順連)宛て ※6
77	正元1	1259	10	15	阿弓河下莊御綿代裁請取状案	『高』又統56-1135	136	鎌8416	
78	正元1	1259	10	23	阿弓河下莊御綿代裁請取状案	『高』又統56-1135	136	鎌8419	
79	正元1	1259	12	25	阿弓河下莊御綿代裁請取状案	『高』又統56-1135	136	鎌8453	
80	正元1	1259	7	8	阿弓河下公文光澄申状	『高』又統78-1403	138	鎌8390	
81	正元1	1259	8		阿弓河莊上下公文請文	『高』又統78-1419	139	鎌8404	
82	正元1	1259	9		阿弓河下公文紀光澄申状	『高』又統78-1402	140	鎌8413	
83	正元1	1259	10		阿弓河下莊地頭湯淺光信訴状	『高』又統57-1158	141		※7 瑞裏銘・裏花押
84	正元1	1259	11	20	阿弓河莊年貢納注文	『高』又統50-928	142	鎌8433	
85	正元頃	1259			阿弓河莊年貢納解事書案	『高』又統78-1434	113	鎌6733	
86	正元頃	1259			某消息	『高』又統66-1113	178	鎌8634	阿114の紙背。播磨法橋の名が見える。
87	文応1	1260	9	27	阿弓河下莊御綿代裁請取状案	『高』又統56-1135	136	鎌8659	
88	文応1	1260	10	8	阿弓河下莊御綿代裁請取状案	『高』又統56-1135	136	鎌8663	
89	文応1	1260	11	27	阿弓河下莊御綿代裁請取状案	『高』又統56-1135	136	鎌8679	
90	文応1	1260	8	26	円満院公文所下知状案	『高』又統34-354	143	鎌8654	阿132の紙背
91	文応1	1260	11		阿弓河莊下村預所得分注進状	『高』又統78-1408	144	鎌8682	
92	文応頃	1260	8	30	阿弓河莊上下莊御半貢綿員数注文状案	『高』又統78-1433	115	鎌6732	阿113と 同筆跡
93	弘長1	1261	3		阿弓河莊公文年貢注進状	『高』又統56-1395	146	鎌8641	
94	弘長1	1261	9	10	御熊野詣道米注進状	『高』又統78-1409	148	鎌8715	
95	弘長1	1261	10	19	阿弓河莊下村年貢綿送状	高野山正智院文書	149	鎌8726	
96	弘長1	1261	11		阿弓河莊上下莊官百姓等請文	『高』又統78-1407	150	鎌8743	
97	弘長1	1261	11		阿弓河莊下村綿注進状	『高』又統78-1413	151	鎌8744	
98	弘長2	1262	3	2	阿弓河莊綿結解状案	『高』又統56-1124	152	鎌8777	
99	弘長2	1262	9	29	阿弓河莊官百姓等申状	『高』又統78-1410	156	鎌8875	
100	弘長3	1263	2	12	阿弓河上下莊々々案	金剛峯寺文書	160	鎌8925	
101	弘長3	1263	2	16	阿弓河莊官請文	『高』又統78-1411	161	鎌8931	

	和暦	西暦	月	日	文 書 名	原出典 (※1)	阿弓河莊 史料(※2)	遺文	備 考 (※3)
	文永1	1264	6	6	円満院公文所縮未進注進士代	『高』又続78-1412	162	鎌9106	
102	文永1	1264	10	30	阿弓河莊莊官材木請文	『高』又続58-1163	163	鎌9353	
103	文永1	1264	10		阿弓河莊莊官注文案	『高』又続78-1422	164	鎌9175	
104	文永2	1265	9	23	阿弓河莊莊官百姓等材木請文	『高』又続56-1140	165	鎌9353	
105	文永2	1265	10	5	六波羅召文御教書案	『高』又続78-1414	166	鎌9363	
106	文永3	1266	9	3	六波羅御教書案	高野山御影堂文書	なし	なし	清補1
107	文永3	1267			阿弓河莊雜掌訴状案	『高』又続56-1128	168	鎌9828	
108	文永4	1267			阿弓河莊雜掌陳状案	高野山正智院文書	169	鎌9812	
109	文永4	1267	5	10	阿弓河上荘在家縮注文案	『高』又続56-1122	170	鎌8136	
110	文永4	1267	5	30	六波羅召文御教書案	『高』又続78-1415	171	鎌9713	
111	年月日未詳				授樂寺別当次第	『高』又続34-380	172	鎌9714	
112	文永4	1267	9	29	法印任快書状	『高』宝33-430	180	鎌9832	※5
113	文永4	1267	11	8	阿弓河上下莊地頭等言上状	『高』又続79-1437	174	鎌9799	※7 瑞真銘・真花押は新藤基永
114	文永4	1267	12	6	六波羅召文御教書案	『高』又続78-1416	175	鎌9812	
115	文永4	1267	12		阿弓河莊雜掌陳状士代	『高』又続56-1129	176	鎌9826	
116	文永4	1267			阿弓河莊莊官言上状案	『高』又続13-170	177	鎌9830	
117	文永4	1267			阿弓河莊莊官言上状案	『高』又続54-366	179	鎌9827	
118	文永4	1267	12	20	法印(任快)書状案	『高』又続34-351	181	鎌9833	
119	文永4	1264			阿弓河莊雜掌重言上状案断簡	高野山御影堂文書	なし	なし	清補2
120	文永4・5 ～65	1264			高野山御影堂文書	高野山正智院文書	182	鎌10236	
121	文永5	1268	4	25	関東御教書案	壬生家古文書	183	鎌10392	
122	文永5	1268	11	13	龜山天皇宣旨写	『高』又続57-1156	185	鎌10409	
123	文永6	1269	3		湯浅入道智眼申状案	『高』又続57-1157	186	鎌10453	
124	文永6	1269	6		湯浅入道智眼申状案	『高』又続57-1159	187	鎌10410	
125	文永6	1269			湯浅入道智眼申状案	『高』又続57-1145	188	鎌10411	
126	年月未詳		8	19	法橋快真書状案	『高』又続56-1138	190	なし	
127	年月日未詳				阿弓河莊上村田代綿等注文	『高』又続56-1127	191	鎌11082	
128	文永9	1272	8	13	阿弓河莊上村臥田注文	『高』又続78-1418	192	鎌11083	
129	文永9	1272	8	13	阿弓河莊上村進上勘注進状	『高』又続78-1417	193	鎌11339	
130	文永10	1273	6	4	阿弓河上荘在家等檢注目録案	『高』又続56-1112	194	鎌11338	
131	文永10	1273	6	4	阿弓河上荘田代檢注目録案	『高』又続79-1467	195	鎌11345	
132	文永10	1273	6	12	阿弓河上下荘田田配分注文	『高』又続56-1123	196	鎌11384	
133	文永10	1273	8	10	円満院宮門助法親王御教書案	『高』又続78-1420			

	和暦	西暦	月	日	文 書 名	原出典 (※1)	阿弔河莊 史料(※2)	遺文	備 考 (※3)
134	文永11	1274	2	3	阿弔河莊下村殿入草刈注文	『高』又統78-1421	201	鎌11534	
135	文永11	1274	2	7	阿弔河莊上村殿入草刈注文	『高』又統56-1126	202	鎌11535	
136	文永11	1274	11	24	散位某奉書案 (円満院門跡円助法親王 御教書案)	高野山御影堂文書	なし	なし	清補3 (1)
137	文永11	1274	11	24	散位某書状案	高野山御影堂文書	なし	なし	清補3 (2)
138	文永11	1274	11	24	散位某奉書案 (円満院門跡円助法親王 御教書案)	高野山御影堂文書	なし	なし	清補3 (3)
139	建治1カ	1275	3	8	円満院宮門助法親王御教書案	『高』宝33-427	197	鎌11385	※4
140	建治1カ	1275	3	9	阿弔河莊地頭湯浅宗親請文	『高』又統57-141	198	鎌11259	※4
141	建治1カ	1275	3	10	湯浅宗親書状	『高』又統34-388	227	なし	※4
142	建治1カ	1275	3	14	地頭湯浅宗親重請文所簡	『高』宝16-204	204	鎌8778	※4
143	建治1カ	1275	3	14	左衛門尉孝重書状案	『高』又統79-1456	199	鎌11386	※4
144	建治1カ	1275	3	14	円満院公文所注進状案	『高』又統79-1436	228	なし	※4
145	建治1カ	1275	3	14	円満院円助法親王御教書案	『高』又統79-1436	228	なし	※4
146	建治1カ	1275	3	19	僧唯浄書状	『高』又統79-1446	205	鎌12268	※4
147	建治1カ	1275	3	20	円満院円助法親王御教書案	『高』宝33-428	229	なし	※4
148	文永 ～建治カ	1264 ～1278			公文乗進・追捕使光佛進署状	『高』又統50-984	なし	鎌11534	※5

- ※1 「高野山文書」又総宝簡集は「高」又総、総宝簡集は「高」宝、とそれぞれ略表記をしている。
 ※2 仲村尚編「肥前国阿弔河莊史料一、二」(吉川弘文館、1976)。目録作成にあたって、本史料集に阿弔河莊関係史料として所載しているものであっても、明らかに阿弔河莊のものではないと判断した史料は本目録では除外した。
 ※3 「清水町監資料編」の番号を清 (番号) と、その他特記事項を記した。
 ※4 河野通明「阿弔河莊をめぐる歴史」と円満院」(中世寺院史研究会編『中世寺院の研究 (上)』法藏館、1988)。
 ※5 高橋修「阿弔河莊の「島入道頼通」―正元～建治期相論の一断片―」(同『中世武士と地域社会』、2000 [初出1990])。
 ※6 赤澤泰彦「肥前国阿弔河莊に残された二通の訴状正文―鎌倉期における訴状正文の機能に関する一考察―」(『古文書研究』65号、2007)。
 ※7